

保育養成校学生の保育実習に対する不安の解明

田 辺 恭 子
後 藤 永 子

愛知東邦大学

保育養成校学生の保育実習に対する不安の解明

田 辺 恭 子
後 藤 永 子

—目次—

- I 目的
- II 方法
- III 結果
 - 1. 集計結果
 - 1-1 質問1の集計結果
 - 1-2 質問2の集計結果
 - 1-3 質問3の集計結果
 - 2. 「実習あり」と「実習なし」の学生との比較検討
 - 2-1 質問2の「実習あり」と「実習なし」の比較検討
 - 2-2 質問3の「実習あり」と「実習なし」の比較検討
- IV 考察
 - 1. 集計結果の考察
 - 1-1 質問1の考察
 - 1-2 質問2の考察
 - 1-3 質問3の考察
 - 2. 「実習あり」と「実習なし」の学生との比較検討の考察
 - 2-1 質問2の「実習あり」と「実習なし」の比較検討
 - 2-2 質問3の「実習あり」と「実習なし」の比較検討
- V まとめ

I 目的

これまで実習の授業に関わった際、実習が近くなると学生から「実習怖い」や「実習嫌だ」という声を耳にする。長根（2003）の調査によると実習に対しての意欲は高い数値であったが、実習に対して期待感を持ち胸躍らせていたように見えた学生からこのような発言を聞くと筆者は「緊張だけではないのかもしれない、それは一体何故であろう」と疑問を持つことがあった。長谷部（2006）によると「心理面への支援を含めた事前指導の充実が急務」と示唆しており、心理面のケアを行うことにより実習の中止・回避を防ぐことにつながるという。このことは養成校では頭を悩ませる問題であり、改善することは必要項目である。

また、池田・岡田・武石（2013）によると、より充実した教育実習のためにマナーについても

取り上げており、このことは養成校としてどのような項目に対しての不安要因を学生が持っており、それらを理解することで日頃の授業等でマナー改善や向上に努められる。

これらのことからより良い実習指導を行うために学生の実習に対しての不安要因を理解することは最も先決すべきことだと考えた。この論文では実習経験のある学生及び実習経験のない学生双方に質問を行い、比較検討をし、各々どのような不安要因があり、それらを理解し、学生がより良い実習を行い、子ども理解へと繋げることを目的としている。

Ⅱ 方法

対象者：A大学にて保育士資格・幼稚園教諭第1種取得のため、授業を受けている学生80名

調査日：2016年8月7, 8日

調査方法：授業終了後配布・回収（一部授業外の時間にて配布・回収）回答数80名（回収率100%）

その中で実習経験がある学生（以下、「実習あり」と実習経験がない学生（以下、「実習なし」）に分けた。

質問表の始めに実習経験がどの程度あるか、また実習経験がないかを判断するためにこれまで、経験した実習がわかるように記載してもらった。

質問項目は以下の通りである。

質問1. 保育実習を行うにあたり不安な度合いを教えてください。

- | | | | |
|----------|---------|-----------|-------------|
| 1. とても不安 | 2. 少し不安 | 3. 不安ではない | 4. 全く不安ではない |
|----------|---------|-----------|-------------|

質問2. 実習を行うにあたって心配に思っていることは何ですか？（他項目選択）

- | | | | |
|--------------------------|-------------------|-----------------|--------------|
| 1. 積極性 | 2. 挨拶 | 3. 大きな声を出すこと | 4. 常に笑顔でいること |
| 5. 日々の反省の振り返り | 6. 朝起きること・遅刻に対して | 7. 通勤に対して | |
| 8. 自身の健康管理・体調不良による欠席に対して | 9. (SNSを含めて) 守秘義務 | | |
| 10. 失敗に対して | 11. 質問の仕方 | 12. アドバイスの受け止め方 | |
| 13. 保育者との信頼関係構築 | 14. 自身の言葉使いに対して | | |
| 15. 身なり・服装・持ち物について | | | |

質問3. 知識・技能に対して心配であるものを選んで番号を右の口に記入してください。（他項目選択）

- | | | |
|-----------------------|--------------------|-------------|
| 1. 評価に対して | 2. 子どもの健康状態の把握 | 3. 一日の流れの理解 |
| 4. 保育者の仕事内容の理解 | 5. 子どもの発達理解 | 6. 乳児との関わり |
| 7. 日々のねらいや目標設定についての理解 | 8. 部分・責任実習に対して | |
| 9. 日誌の書き方 | 10. 子どもができないことへの援助 | |
| 11. 手遊びの仕方 | 12. 絵本の読み方 | 13. ピアノに対して |

- | | |
|--------------------------|---------------------|
| 14. 環境構成ができるか | 15. 保育者とのコミュニケーション |
| 16. 保育者の意図が理解できるか | 17. 報告・連絡・相談に関して |
| 18. 保護者とのコミュニケーション | 19. 子どもから受け入れられるか |
| 20. 子どもとのコミュニケーション | 21. 子どもの気持ちの理解 |
| 22. 子どもの探究心・好奇心・意欲の引き出し方 | 23. 安全な環境への配慮 |
| 24. 子ども同士のトラブルの際の関わり方 | 25. よくないことをした時の関わり方 |
| 26. 子どもの興味・関心の引き出し方 | 27. 障がい児との関わり方 |
| 28. 保育者として資質があるのか | 29. 製作の際に文具の説明と安全面 |
| 30. 緊急時の対応（応急処置） | |

実習経験後再度アンケートを行い、比較検討を行うことを視野に入れ、回答者が同一であることを確認するため学籍番号と氏名を記入してもらったが、論文では本人が特定出来ないことを伝え、任意で記入してもらった。

質問項目は「保育士総合研究会の新保育所保育指針に基づく自己チェックリスト」及び「保育実習Ⅰ・Ⅱの評価項目・評価の視点」を中心に質問項目を作成した。実習未経験の学生も含まれているため、質問項目では保護者支援に対しての項目は1つ程度しか入れなかった。さらに質問項目の吟味については、共同研究者と話し合いを行い、質問項目が独断的にならないようにした。

Ⅲ 結果

1. 集計結果

有効回答数は80名中80名の100%であった。

そのうち「実習あり」の学生は27名（34%）であり、「実習なし」の学生は53名（66%）であった。「実習あり」の学生の実習経験は、保育

実習Ⅰ、教育実習、保育実習Ⅱなど経験度合いは各々であるが、回答数が共通しているものが少ないため、1つでも実習経験がある学生は「実習あり」の学生として分類している（27名 34%）。回答者数の内訳を表1に示す。なお、実数が多くないため、%値は1つの事例として受け止めることにする。

表1 対象者内訳

対象者	人数	%
全体	80	100
実習あり	27	34
実習なし	53	66

1-1 質問1の集計結果

質問1では実習を行うにあたってどのくらい不安であるかを選択してもらった。その結果を表2で示す。

表2 不安度合い

		n	1	2	3	4
全体(80名)	回答数	80	41	38	1	0
	%		51.3	47.5	1.3	0
実習あり(27名)	回答数	27	15	12	0	0
	%		55.6	44.4	0	0
実習なし(53名)	回答数	53	26	26	1	0
	%		49.1	49.1	1.9	0

全ての分類で「とても不安」が最も回答率が高かった。「実習あり」の学生の回答は「とても不安」と「少し不安」で100%を占めている。

「実習なし」の回答では「とても不安」と「少し不安」が同率の結果となった。さらに1名のみ「不安ではない」という結果であり、その回答をしたのは実習なしの学生であった。「全く不安ではない」と回答した学生は0名(0%)であった。この結果から「実習あり」の学生も「実習なし」の学生も実習に対しては大変不安を持っていることが明らかとなった。

1-2 質問2の集計結果

質問2、3は複数回答のため、%は複数回答に対する割合で記載した。割合は小数点第二位を四捨五入して出しているため合計は100%とならない。

質問2では、実習を行うにあたって態度の面で心配であることを尋ねた。質問2の全体の回答の割合は表3に示した。

表3 態度に対して(1)

		n	1.積極性	2.挨拶	3.大きな声を出すこと	4.常に笑顔でいること	5.日々の反省の振り返り	6.朝起きること・遅刻に対して	7.通勤に対して
全体(80名)	回答数	227	28	3	9	8	34	8	3
	%		9.9	1.1	3.2	2.8	12	2.8	1.1
実習あり(27名)	回答数	94	16	3	2	3	11	1	0
	%		17	3.2	2.1	3.2	11.7	1.1	0
実習なし(53名)	回答数	140	12	0	7	5	23	7	3
	%		8.6	0	5	3.6	16.4	5	2.1
全体、実習あり、実習なしの合計			56	6	18	16	68	16	6
全体平均値			18.7	2	6	5.3	22.7	5.3	2

表3 態度に対して(2)

		n	8.自身の健康管理・体調不良による欠席に対して	9.(SNSを含めて)守秘義務	10.失敗に対して	11.質問の仕方	12.アドバイスの受け止め方	13.保育者との信頼関係構築	14.自身の言葉使いに対して	15.身なり・服装・持ち物について
全体(80名)	回答数	134	11	3	53	11	4	34	18	0
	%		3.9	1.1	18.7	3.9	1.4	12	6.4	0
実習あり(27名)	回答数	58	3	1	23	8	2	12	9	0
	%		3.2	1.1	24.5	8.5	2.1	12.8	9.6	0
実習なし(53名)	回答数	83	8	2	30	10	2	22	9	0
	%		5.7	1.4	21.4	7.1	1.4	15.7	6.4	0
全体、実習あり、実習なしの合計			22	6	106	29	8	68	36	0
全体平均値			7.3	2	35.3	9.7	2.7	22.7	12	0

回答の中で最も多かったのは「全体回答」、「実習あり」、「実習なし」全ての分野で「10. 失敗に対して」（全体回答53名（18.7%）、実習あり23名（24.5%）実習なし30名（21.4%））であった。全体の回答では20%を超えてはいないが、「実習あり」と「実習なし」の回答の割合が20%を超えている項目は「10. 失敗に対して」のみであったことから、この項目の回答数がいかに高いかわかる。

最も回答が少なかったのは全ての分野で「15. 身なり・服装・持ち物について」（全体0名（0%）、実習あり0名（0%）、実習なし0名（0%））であった。

解答率が10%以上と高かったのは、全体の回答では「5. 日々の反省の振り返り」34名（12.0%）、「10. 失敗に対して」53名（18.7%）、「13. 保育者との信頼関係構築」34名（12.0%）であった。「実習あり」では「1. 積極性」16名（17.0%）、「5. 日々の反省の振り返り」11名（11.7%）、「10. 失敗に対して」23名（24.5%）、「13. 保育者との信頼関係構築」12名（12.8%）、「実習なし」では「5. 日々の反省振り返り」23名（16.4%）、「10. 失敗に対して」30名（21.4%）、「13. 保育士との信頼関係構築」22名（15.7%）であった。10%を超える項目は実習ありの「1. 積極性」以外同じ項目であった。「1. 積極性」に関しては17%と高い回答率となり「10. 失敗に対して」についでの高い回答率であった。

回答率が2%以下と低かった項目は全体回答では「2. 挨拶」3名（1.1%）、「7. 通勤に対して」3名（1.1%）、「9. (SNSを含めて) 守秘義務」3名（1.1%）、「12. アドバイスの受け止め方」4名（1.4%）、「15. 身なり・服装・持ち物について」0名（0%）であり、「実習あり」では「6. 朝起きること・遅刻に対して」1名（1.1%）、「7. 通勤に対して」0名（0%）、「9. (SNSを含めて) 守秘義務」1名（1.1%）、「15. 身なり・服装・持ち物について」0名（0%）であり、「実習なし」では「2. 挨拶」0名（0%）、「7. 通勤に対して」3名（2.1%）、「9. (SNSを含めて) 守秘義務」2名（1.4%）、「12. アドバイスの受け止め方」2名（1.4%）、「15. 身なり・服装・持ち物について」0名（0%）であった。

1-3 質問3の集計結果

質問3では、実習を行うにあたっての知識・技術面で心配であることを尋ねた。全体の回答の割合は表4に示した。

表4 知識・技能に対して(1)

		n	1評価に対して	2子どもの健康状態の把握	3一日の流れの理解	4保育者の仕事内容の理解	5子どもの発達理解	6乳児との関わり	7日々のねらいや目標設定についての理解	8部分・責任実習に対して	9日誌の書き方	10子どもができないことへの援助
全体(80名)	回答数	479	17	7	4	5	11	10	18	49	48	9
	%		3.6	1.5	0.8	1	2.3	2.1	3.8	10.2	10	1.9
実習あり(27名)	回答数	163	6	1	1	0	7	3	5	19	13	2
	%		5.43	0.6	0.6	0	4.3	1.8	3.1	11.7	8	1.2
実習なし(53名)	回答数	316	11	6	3	5	4	7	13	30	35	7
	%		3.5	1.9	1	1.6	1.3	2.2	4.1	9.5	11.1	2.2
全体、実習あり、実習なしの合計			34	14	8	10	22	20	36	98	96	18
全体平均値			11.3	4.7	2.7	3.3	7.3	6.7	12	32.7	32	6

表4 知識・技能に対して(2)

		n	11.手遊びの仕方	12.絵本の読み方	13.ピアノに対して	14.環境構成ができるか	15.保育者とのコミュニケーション	16.保育者の意図が理解できるか	17.報告・連絡・相談に関して	18.保護者とのコミュニケーション	19.子どもから受け入れられるか	20.子どもとのコミュニケーション
全体(80名)	回答数	135	5	4	47	20	16	13	0	19	6	5
	%		1	0.8	9.8	4.2	3.3	2.7	0	4	1.6	1
実習あり(27名)	回答数	51	2	3	18	9	5	7	0	4	2	1
	%		1.2	1.8	11	5.5	3.1	4.3	0	2.5	1.2	0.6
実習なし(53名)	回答数	84	3	1	29	11	11	6	0	15	4	4
	%		1	0.3	9.2	3.5	3.5	1.9	0	4.8	1.3	1.3
全体、実習あり、実習なしの合計			10	8	94	40	32	26	0	38	12	10
全体平均値			3.3	2.7	31.3	13.3	10.7	8.7	0	12.7	4	3.3

表4 知識・技能に対して(3)

		n	21.子どもの気持ちの理解	22.子どもの探求心・好奇心・意欲の引き出し方	23.安全な環境への配慮	24.子ども同士のトラブルの関わり方	25.よくないことをした時の関わり方	26.子どもの興味・関心の引き出し方	27.障がい児との関わり方	28.保育者としての資質があるか	29.製作の際に文具の説明と安全面	30.緊急時の対応(応急処置)
全体(80名)	回答数	166	10	18	3	32	15	15	8	28	5	32
	%		2.1	3.8	0.6	6.7	3.1	3.1	1.7	5.9	1	6.7
実習あり(27名)	回答数	55	4	7	2	8	3	6	4	10	2	9
	%		2.5	4.3	1.2	4.9	1.8	3.7	2.5	6.1	1.3	5.5
実習なし(53名)	回答数	111	6	11	1	24	12	9	4	18	3	23
	%		1.9	3.5	0.3	7.6	3.8	2.9	1.3	5.7	1	7.3
全体、実習あり、実習なしの合計			20	36	6	64	30	30	16	56	10	64
全体平均値			6.7	12	2	21.3	10	10	5.3	18.7	3.3	21.3

回答の中で10%を超えた項目は全体では、「8. 部分・責任実習に対して」49名(10.2%)、「9. 日誌の書き方」48名(10.0%)が10%を越える結果となった。「13. ピアノに対して」47名(9.8%)の割合は10%以下であったが、回答人数は「9. 日誌の書き方」48名(10.0%)と1名違いであった。「実習あり」では「8. 部分・責任実習に対して」19名(11.7%)、「13. ピアノに対して」18名(11%)であり、「実習なし」では「9. 日誌の書き方」35名(11.1%)だった。

最も回答が少なかったのは全ての分野で「17. 報告・連絡・相談に関して」(全体0名(0%)、実習あり0名(0%)、実習なし0名(0%))であった。さらに解答率が1%以下の項目は、全体の回答では「3. 一日の流れの理解」4名(0.8%)、「4. 保育者の仕事内容の理解」5名(1.0%)、「11. 手遊びの仕方」5名(1.0%)、「12. 絵本の読み方」4名(0.8%)、「17. 報告・連絡・相談に関して」0名(0%)、「20. 子どもとのコミュニケーション」5名(1.0%)、「23. 安全な環境への配慮」3名(0.6%)、「29. 製作の際に文具の説明と安全面」5名(1.0%)であった。「実習あり」では「2. 子どもの健康状態の把握」1名(0.6%)、「3. 一日の流れの理解」1名(0.6%)、「4. 保育者の仕事内容の理解」0名(0%)、「17. 報告・連絡・相談に関して」0名(0%)、「20. 子どもとのコミュニケーション」1名(0.6%)、「実習なし」では「3. 一日の流れの理解」3名(1.0%)、「11. 手遊びの仕方」3名(1.0%)、「12. 絵本の読み方」1

名（0.3%）、「17. 報告・連絡・相談に関して」0名（0%）、「23. 安全な環境への配慮」1名（0.3%）、「29. 製作の際に文具の説明と安全面」3名（1.0%）であった。「4. 保育者の仕事内容の理解」に関しては「実習あり」の学生は0名（0%）であったのに対して、「実習なし」の学生は5名（1.6%）であった。

2. 「実習あり」と「実習なし」の学生との比較検討

2-1 質問2の「実習あり」と「実習なし」の比較検討

質問2と質問3では「実習あり」の学生と「実習なし」の学生の回答数に多少の差が出た。ただ、「実習あり」の学生と「実習なし」の学生では回答の総数が異なるため、回答率の割合で比較検討を行う。

質問2の結果を図1に示す。

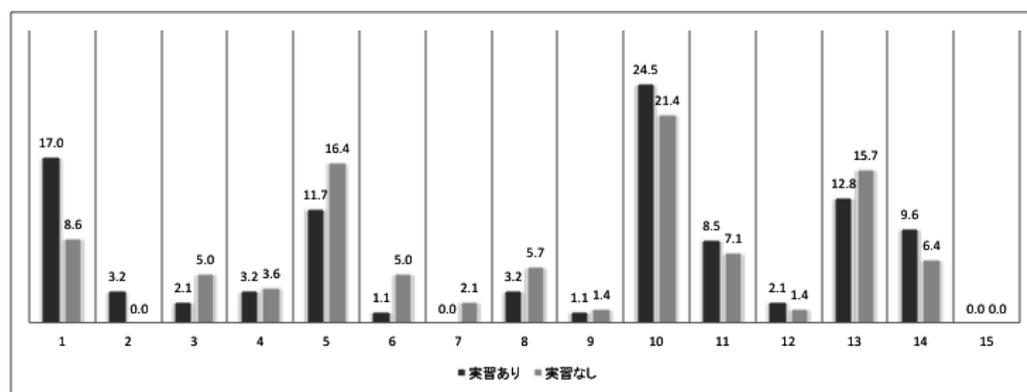


図1 態度に対して

「1. 積極性」17.0%、「2. 挨拶」3.2%、「10. 失敗に対して」24.5%、「11. 質問の仕方」7.1%、「12. アドバイスの受け止め方」2.1%、「14. 自身の言葉使いに対して」9.6%は「実習あり」の学生の方が「実習なし」の学生より割合が高い。特に「1. 積極性」に関しては17%と高い回答率となり、「実習なし」の学生の8.6%の2倍以上の回答率であった。「3. 大きな声を出すこと」5.0%、「4. 常に笑顔でいること」3.6%、「5. 日々の反省の振り返り」16.4%、「6. 朝起きること・遅刻に対して」5.0%、「7. 通勤に対して」2.1%、「8. 自身の健康管理・体調不良による欠席に対して」5.7%、「9. (SNSを含めて) 守秘義務」1.4%、「13. 保育者との信頼関係構築」15.7%は「実習なし」の学生の方が割合が高かった。

「3. 大きな声を出すこと」「6. 朝起きること・遅刻に対して」5.0%は「実習あり」の学生の2倍以上の回答率であった。

「7. 通勤に対して」は「実習なし」の学生の回答3名（2.1%）であったが、「実習あり」の学生0名（0%）であった。「2. 挨拶」に対しては「実習なし」の学生には回答0名（0%）であったが、「実習あり」の学生3名（3.2%）の回答が見られた。

2-2 質問3の「実習あり」と「実習なし」の比較検討

質問3の結果を図2に示す。

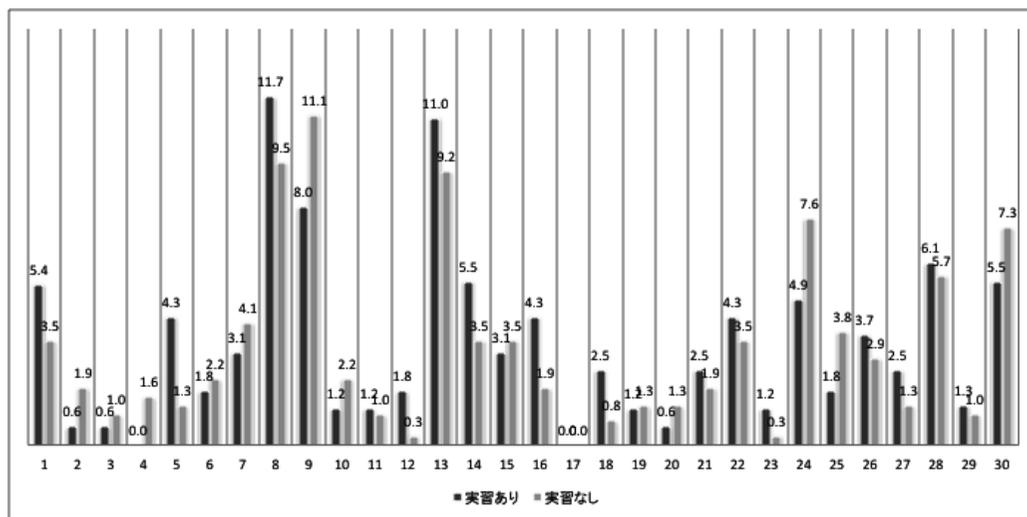


図2 知識・技能に対して

「1. 評価に対して」5.4%、「5. 子どもの発達理解」4.3%、「8. 部分・責任実習に対して」11.7%、「11. 手遊びの仕方」1.2%、「12. 絵本の読み方」1.8%、「13. ピアノに対して」11.0%、「14. 環境構成ができるか」5.5%、「16. 保育者の意図が理解できるか」4.3%、「18. 保護者とのコミュニケーション」2.5%、「21. 子どもの気持ちの理解」2.5%、「22. 子どもの探究心・好奇心・意欲の引き出し方」4.3%、「23. 安全な環境への配慮」1.2%、「26. 子どもの興味・関心の引き出し方」3.7%、「27. 障がい児との関わり方」2.5%、「28. 保育者として素質があるのか」6.1%、「29. 製作の際の説明と安全面」1.3%、「30. 緊急時の対応（応急処置）」6.7%は「実習あり」の学生の回答率の方が高い結果であった。

「5. 子どもの発達理解」、「12. 絵本の読み方」、「16. 保育者の意図が理解できるか」、「18. 保護者とのコミュニケーション」、「23. 安全な環境への配慮」は「実習なし」の学生と比べて2倍以上の結果であった。

「2. 子どもの健康状態の把握」1.9%、「3. 一日の流れの理解」1.0%、「4. 保育者の仕事内容の理解」1.6%、「6. 乳児との関わり」2.2%、「7. 日々の狙いや目標設定についての理解」4.1%、「9. 日誌の書き方」11.1%、「10. 子どもができないことへの援助」2.2%、「15. 保育者とのコミュニケーション」3.5%、「19. 子どもから受け入れられるか」1.3%、「20. 子どもとのコミュニケーション」1.3%、「24. 子ども同士のトラブルの際の関わり方」7.6%、「25. よくないことをした時の関わり方」3.8%、「30. 緊急時の対応（応急処置）」7.3%は「実習なし」の学生の回答率の方が高い結果であった。

「2. 子どもの健康状態の把握」、「4. 保育者の仕事内容の理解」、「20. 子どもとのコミュニケーション」は「実習あり」の学生と比べて2倍以上の結果であった。

IV 考察

1. 集計結果の考察

1-1 質問1の考察

質問1「保育実習を行うにあたり不安な度合いについて」では「実習あり」の学生、「実習なし」の学生双方で「とても不安」「少し不安」の割合が高く、実習に対して不安感が強いことが明らかとなった。実習経験のある学生であっても実習に対しては極度に不安を持つことが明らかとなった。長根（2003）の調査で、「保育者としての自信」に対して1年次と比べて2年次後期になると自信が減少する結果が見られ、本学の学生は4年制であるため2年次ではないが同様に保育者として具体的に考えるようになったからこそ、実習経験のある学生であっても自信よりも不安感が高い結果となったのではないかと推測できる。反対に、「実習なし」の学生の結果からみて、不安ではないと回答した学生は少数ではあるが実習経験がないことから実習に対しての不安な面や大変な面がまだ想像上でしかないことで、不安感はあまり高くならなかつたことが推測できるのではないだろうか。

1-2 質問2の考察

質問2「実習を行うにあたって心配に思っていること」では回答率が高かつた項目は「全体回答」及び「実習あり」、「実習なし」のすべての分類の回答で共通した答えが見られた。

異なっていた部分は「実習あり」の学生の回答の「1. 積極性」のみであり、それ以外の項目は共通していた。このことから態度の面では実習を経験した学生も経験したことがない学生もほぼ同じ要因に対して心配であることが明らかとなった。特に「失敗に対する不安感」は実習を経験した学生でも高く、学生は失敗をしてはいけないという考えが強いことが推測できる。そのため、養成校側は実習を行うにあたって失敗をすることを恐れるのではなく、挑戦する心を強め、失敗することはいけないことではないと伝えることは必要なことである。ただ、養成校としては学生の心情をさらに理解するために、どのような失敗に対して学生は不安感を持っているのかなど、不安要因の詳細な事柄を知る必要があり、今後さらに詳しく調査を行うことが必要である。

「5. 日々の反省の振り返り」、「13. 保育者との信頼関係構築」は「全体回答」及び「実習あり」、「実習なし」のすべての分類の回答で10%を超える回答率となっており、高い回答率と言える。「5. 日々の反省の振り返り」は毎日実習を行うにあたり自身の目標やねらいを持つことは大切なことである。その日のできなかったことに対して、どのような部分ができなかったのかといった反省を振り返り、次の日には目標やねらいを持って経験を積むことで実習がより良いものへと繋がる。そのため、不安であるという学生の考えは、より良い実習を行うために大切な不安要因であると考えられる。

「13. 保育者との信頼関係」は大学という同世代との関わりを超えて社会の先輩として保育者と関わることとなる。このことは社会へ出るための準備としても重要な経験だと考えられる。不安であるという回答が多かつたことは同世代以外の人と関わることに慣れていないことが伺えた

ため実習を行うにあたり保育者と信頼関係が構築できるのだろうかという不安が強くなったのであろう。

1-3 質問3の考察

質問3「知識・技能に対して心配であるもの」では回答項目が多かったことから項目ごとの回答率は分散されたため、10%を超える回答率は高いと考えられる。

回答が高かった項目は「実習あり」が「8. 部分・責任実習に対して」、「実習なし」が「9. 日誌の書き方」で2つに分かれた。これは実習を経験した学生はこれまでの実習で部分・責任実習を経験したからこそ大変さを理解し、不安感が高まったことが推測できる。また、「実習なし」の学生は毎日実習日誌を書くという経験がないことから、不安感が高まり、他の項目に比べて割合が高くなったことが推測できる。また、「4. 保育者の仕事内容の理解」に関しては「実習あり」の学生の回答は0名（0%）であったのに対して、「実習なし」の学生は全体回答5名中の5名（100%）であった。実習を経験したことのある学生はこれまでの実習で保育者がどのような仕事を行なっているかをきちんと理解していることが伺えるが、実習を経験したことのない学生は予想が出来ず、保育者はどのような仕事を行うのか想像ができていないことが伺える。さらに乳児との関わり方や子どもとのコミュニケーションの取り方などに対して不安だという回答があり、授業での机上やビデオなどの勉強では知識として理解することはできるが、実際に子どもと関わることは多くないため頭では理解していても行動として動くことが難しいのではないだろうか。養成校としては知識として学生が理解することと共にロールプレイングなどを行うことで実際に現場を想像出来るようになるのではないか。

2. 「実習あり」と「実習なし」の学生との比較検討の考察

2-1 質問2の「実習あり」と「実習なし」の比較検討

質問2の「実習を行うにあたって心配に思っていること」の「実習あり」と「実習なし」の比較では、全体的に見て「実習あり」の学生も「実習なし」の学生も大きく異なる結果ではなかったが、項目によっては割合が2倍のものもあった。詳細に検討すると、「実習あり」の学生と「実習なし」の学生の比較検討では、質問2の回答で「実習あり」の学生が「1. 積極性」16名（17%）に対して不安を持っていることはこれまでの実習から、評価の際に積極性の部分で欠けている、または、もっと積極的に実習を行って欲しいといったことを言われたことがあるのではないかと推測できる。実際に実習を経験したことで積極的に動くことの難しさを感じたのであろう。反対に「実習なし」の学生は、自分は出来るという自信を持っているのかもしれない。

筆者の昨年度の学生にこれまでの実習に対してどのような感想を持ったかの聞き取りでは、実習の際「なかなか自分から動けなかった」、「何をしたいかわからなかった」、「私の言葉使いに対して、子どもが真似をするから気をつけないといけないと思った」などと感想を聞いたことがある。このことから、「実習あり」の学生の回答と一致している部分があり、実際に実習を経験

したことで自身の問題点が浮き彫りになると同時に、不安感が高まったのではないだろうか。また、同様に昨年度の実習で学生の挨拶がきちんと行われていなかった学生の話も聞いた。「3. 大きな声を出すこと」では「実習あり」の学生2.1%と比べて「実習なし」の学生は7%と3倍以上の差が明らかとなったことから実習経験のない学生は、実習の際に大きな声を出すことに対して慣れていないことが伺える。当養成校でも日頃から声を出す経験がないこと、また、多人数の子どもを前にして声を出すことに対して慣れていないことに対して危惧しており、授業の際、多人数の学生の前で挨拶などを学生自身に行わせ慣れることを経験させている。その際でもどのような言葉を出したら良いのわからずそれを隠そうと照れなどが見られることがよくあるため、常日頃から慣れさせることは実際に実習を行う際に自信を持って行うために必要なことであると考える。

2-2 質問3の「実習あり」と「実習なし」の比較検討の考察

質問3「知識・技能に対して心配であるもの」では「実習あり」の学生の回答のほうが、及び子どもや保育者、保護者とのコミュニケーションなどの対人関係に対して心配であるという考え方が読み取れた。仲谷・三島・高畑・稲田・後藤（2015）の調査では「授業に対する不安が高いが、指導教員や実習生との関係性についての不安は低いこと」という結果であったが、実習を経験したことのある学生の回答では指導担当の保育者との関係性に対しては不安感を持っていた。ただ、今回の調査では実習生に関しては質問項目を入れていないため、その面での結果はわからなかった。

「愛知連絡協議会の保育実習要項」及び、「保育実習指導のミニマムスタンダードの評価票様式」を参考に、「22. 子どもの探究心・好奇心・意欲の引き出し方」「26. 子どもの興味・関心の引き出し方」は評価票様式「保育実習Ⅱ」の「保育技術の展開」に繋がると考えられ、「21. 子どもの気持ちの理解」は保育実習Ⅱでは「一人一人の子どもへの対応」に該当する。子どもと関わるだけではなく保育者になるためにという思いが実習を重ねることで高いものとなったと考えられる。「11. 手遊びの仕方」「12. 絵本の読み方」「13. ピアノに対して」もさらなる技術向上を考えるようになっているからこそ、不安要因としてあげられたのではないだろうか。保育実習を経験したことのある学生は保育実習Ⅰの学生（「実習なし」の学生）と比べて、保育者として発展した不安要因を持っているのであろう。

「実習なし」の学生の回答の傾向では個人の技能に対して不安であるという回答よりも乳児や子どもとの関わり方に関して不安である傾向が見られた。これはまだ実習を行ったことがないため子どもとどう関われば良いのか不安であると考えられる学生はいるということである。また、「3. 一日の流れの理解」や「4. 保育者の仕事内容の理解」など保育所の生活の流れは普段大学に通っている学生とは異なることは当然であり、保育所の一日及び保育者の一日の働きがどういったものであるか知る必要は実習を行うため実習期間の早い段階で理解する必要がある。ただ、これらの不安は実習を経験することによって改善されていく結果が見られたため、実習経験のない学

生だからこそ明らかとなった結果と言える。上記の結果は評価票様式「保育実習Ⅰ」と通ずる回答が多く、初めての实習で理解する必要性のある項目であると言える。

V まとめ

養成校側としてはこれまで実習に向けて授業を行い、いよいよ学生が実習現場へ挑むことへの心配という気持ち反面、実習で子どもたちと直接関われる機会を持てることに期待感が高まっていた。しかし、養成校側は学生の不安感が募り、どれだけ実習を経験していても不安度合いは高いということを理解しておかなければならない。そして積極性を持つためにも養成校側は学生に対して失敗をすることがいけないことではないといったことや、積極性を持つ必要があることを伝えることで失敗することばかりに不安を持つことは軽減されるのではないだろうか。さらに学生の意識の変化や緊張をほぐすことと繋がるのではないだろうか。入江・福池・入江（2014）も「実習生は不安を一人で抱え込むのではなく、お互いに話し合い、悩みを共有し、その解決にむけて協力することが不安の低減化につながるものであり、大学はその機会を提供することが事前指導として重要なのではないかと考えられる」と述べていることから養成校側は学生の不安を理解し、話を聞くことやアドバイスを伝えることはより良い実習指導へと繋がると考えられる。失敗することよりも、積極性を持つことや報告・連絡・相談を行うことなど、より実習を行なう上で大切なことを養成校側は学生に伝えることが大切であり、養成校側も今後さらに行うべきことである。さらに実習中は養成校側もいつでも対応・フォローする安心感を持って実習に挑んで欲しいと考えるため、実習前の授業等で知識だけでなく日常生活での大切なポイントなどを伝える必要性と重要性は大きい。学生が心情面で安心感や自信を持つことで子どもとの関わり方や成長の喜びに対して目を向ける余裕が出てくるため、さらなる保育者としての能力向上・子ども理解へ繋がるのが期待される。そして、学生が子どもの成長・発達を願うことが保育の最大の目標であることを理解し、意識して取り組むことでより良い保育実習だけでなくより良い保育となる。今回の調査では、「実習あり」の学生と「実習なし」の学生が不安と考える項目は大きく異なることを推測していたが、そのような結果はあまり見られず共通した回答も多く見られたため、今後はそれらの心配な要因に対してさらに深く質問をし、より細かな調査を行うことが必要であると考え。今後の調査では実習不安尺度などを使用し、さらに細かく分析を行うことも視野に入れている。

引用・参考文献

- [1] 保育総合研究会監修『新保育所保育指針に基づく自己チェックリスト100』世界文化社, 2009
- [2] 全国保育士養成協議会編集『保育実習指導のミニマムスタンダードー現場と養成校が協働して保育士を育てるー』北大路出版, 2014
- [3] 仲谷明考・三島知剛・高旗浩志・稲田修一・後藤大輔『3年次教育実習に関する学生の意識の検討ー平成25年度受講生のアンケート結果からー』岡山大学教師教育センター紀要, 第5号 p26-34, 2015

- [4] 入江和夫・福地照輝・入江三津子『学生の保育実習不安と自立感』山口大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要, 第38号 p.21-28, 2014
- [5] 清水里美・吉島紀江・志澤康弘・藤本史『保育士養成課程における実習指導上の留意点―施設実習の事前指導における教育内容の検討―』平安女学院大学研究年報, 第13号 p19-28, 2012
- [6] 池田浩明・岡田透・武石詔吾『特別支援学校の教育実習における学生の意識について―期待・不安及び意見・要望に関するアンケート調査から―』藤女子大学人間生活学部紀要, 第50号 p95-102, 2013
- [7] 中西和子『保育実習における不安の変容に関する一考察(1)』教心第50回総会, 2008
- [8] 長根利紀代『保育者を目指す学生の「自覚」について―教育実習を通して―』名古屋柳城短期大学研究紀要, 第25号 p77-92, 20

〔付記〕

アンケートにご協力して頂いたA大学保育養成学科の学生の皆様に感謝申し上げます。
保育養成校に携わるものとして、この研究をより良い保育に繋げていきたいと考えております。

なお、今回の研究は、共同研究の性格上、担当者の執筆分担箇所が抽出不可能であることをお断りします。

受理日 平成28年10月3日